

令和7年度 南丹市立美山小学校 最終学校評価

■ブロック教育目標

「ふるさとを愛し 夢や希望に向かって 自らを高める 美山っ子の育成」

■学校教育目標

子どもが 大人が 生き生きしている学校

A: 十分な成果
B: 成果がみられる
C: やや課題がみられる
D: 課題が大きい

■自己評価

南丹市教育の指針	令和7年の具体的目標 (数値目標含む)	成果	達成度	課題	改善策等
「主体的・対話的で深い学び」の実現	・児童が自ら学ぶ楽しさを実感できる授業を行う。すららドリルや家庭学習の定着により、知識・技能の確実な定着を図る。※学びに向かうアンケート項目8割	・セルフデザイン学習をどの学年・教職員も実施し児童が自ら学ぶ姿につながる事が確認できた。	B	・まだセルフデザイン学習の構築に曖昧なところがあるので、研究を続ける。アンケートの肯定的な回答80%を上回った学年が半分だった。	・セルフデザイン学習の定義を整理し、授業参観チェックシートを使って授業研究を進める。定期的にアンケートを実施し、児童の変容を分析する。
1人1台端末の効果的な活用	・低学年は、配信された課題と自己選択、高学年は低学年の内容に加えて、自らの学習状況に応じた課題配信をして復習できるようにする。	・すららタイムや持ち帰り学習を全校で取り組み、学年に応じた活用について一定の定着が図れた。	B	・自身に課題配信する方法について振り返りの場が設けられず、課題の整理ができていない。	・すららの取り組み方に関するアンケートや振り返りの時期や回数を明確にし課題を児童教員で共有する。
人権教育を基盤とした教育の推進	・正しい価値観は、それぞれがもっているが、それに基づいて行動できるように道徳の授業を大切にしている。	・児童アンケート自己肯定感(よいところ)87.8%、学校での安心感(いじめ等)89.8%言動への配慮(人を傷つけないように)91.8%の結果が出ている。	B	・人権の取組がその時だけになってしまっていた。・人権の取組が教師側からの提案になっていた。	・委員会から人権目標を提案してもらう。取組がしっかりと行えるように年度当初に人権月間を行事予定に組み込み、委員会活動の中にも組み込む。
いじめや問題行動の未然防止や早期対応	・「こどもカルテ」を有効に活用し、児童理解を深める。また、途切れない児童理解を行い、学年間連携だけでなく、校種間連携をスムーズに行う。	・いじめアンケートの結果を受け、調査委員会の実施だけでなく、職員会議などの時間を利用し、全職員で共有することができた。学校での安心感(いじめ等)89.8%	A	・何でも話せる関係性が作れなかった児童、相談窓口となる人がわからない児童がいた。	・いじめアンケートを活用するとともに、普段からなんでも話しやすい関係性の構築を行う。また、聞き取りにて児童それぞれの状況の把握に努める。
食に関する指導の充実	・栽培活動をする中で食に対する興味・関心を高めたり、食育指導により食べ物を大切にすることや感謝の心を育成したりし、残菜を昨年度の7割以下にする。	・残菜が昨年度の6割程度になった	A	・給食に出せるものを、その時期に合わせて栽培するのは難しかった。メニューによって残菜が多い日があるなどの課題が残る。	・食育の授業を全学年1学期中にも入れることで、苦手なものにも挑戦しようという意欲をもたせる。
特別支援教育の充実(さくら分室含む)	・月1回、火曜日を原則として校内支援委員会を開催する。 ・1学期の「ひまわり」利用の状況を見て運用マニュアルについて協議し、2学期からマニュアルに基づいて運用できるようにする。	・要支援の児童の実態について定期的に把握し支援方法などの協議ができた。ケース会議にも結び付いた。	B	・「ひまわり」運用マニュアルは作成に至っていない。	・「ひまわり」の活用ガイドライン作成をコーディネーターが作り教職員全体で協議して策定。全教職員の共通理解のもと運用できるようにする。
「地域とともにある学校づくり」推進体制の構築	・運営協議会(小学部・中学部合同)において、協議した児童・保護者アンケートを1学期末に実施する。 ・運営協議会でアンケート結果を分析し、2学期以降の具体的な教育活動に生かしていく。	・アンケート結果等、地域・学校の実態をもとにした分析、協議を通じた具体的教育活動(ぐんぐん等)の創造の母体として運営協議会を機能させることができた。	A	・放課後子ども教室については試行であったが余裕がなかった。また、地域の方からの協力体制について、持続性が大きな課題。	・総括を活かして修正を加えつつ、令和8年度当初から年間の教育活動にバランスとタイミングよく位置付けていく。
こどもと地域がともに学ぶ機会の充実	・子どもと地域が共に学ぶ機会を充実させる。また、その学習をホームページや学校だよりを通して紹介し、地域との結びつきを強めていく。	・放課後子ども教室を6回実施。コーディネーターが地域の人材を集め、子どもたちの興味関心の幅を広げることができ、保護者アンケートでも肯定的な意見が多く寄せられた。	A	・一方で、実施時期、子どもの希望調整の困難さ、来校者の確認などが課題	・年度初めに計画を入れ、余裕をもって実施できるようにする。子ども発信の教室も実施できないか検討する。コーディネーターと担任の面談時期を設定し、見直しをもった指導につなげる。

■アンケート結果	■学校関係者評価	■第三者評価
<p>・極めて高い満足度: 保護者の満足度100%、児童の肯定率98%と、学校への厚い信頼が示された。</p> <p>・主体性を育む学び: セルフデザイン学習や地域連携「ぐんぐんタイム」が、児童の意欲と自己肯定感を向上させている。</p> <p>・思いやりのある校風: 児童の約9割が他者への配慮を意識し、地域からも児童の優しさが認められている。</p> <p>・心理・生活面の課題: 6年生の学習不安へのケアや、2時間超が約4割にのぼるメディア利用の適正化が急務。</p> <p>・地域連携の運用改善: 強固な協力体制を維持しつつ、活動募集の早期化など運用の効率化が求められている。</p>	<p>・「60分プロジェクト(金曜:放課後子ども教室)」が計6回実施され、約200人の地域住民が関わり、児童の友人関係の固定化解消や、多様な大人との交流に大きな成果を上げた。</p> <p>・保護者から「安心して通わせられる」「通わせてよかった」という回答が100%に達し、極めて高い信頼を得ていることが確認された。</p> <p>・「子供が、大人が、生き生きしている学校」を掲げ、心理的安全性の向上とウェルビーイングの実現に向けた取り組みが充実していた。</p> <p>・今年度は全教職員が欠けることなく年度末を迎えられたことが、学校の安定と教育の質の維持、地域からの信頼に大きく寄与した。</p>	<p>・地域と連携した多彩な学びを通して、子どもたちに「地域の一員としての自覚」や「将来の担い手としての意識」が着実に育っている点を高く評価する。</p> <p>・アンケートにも表れているように、主体的に学ぼうとする姿勢が伸びており、セルフデザイン学習を軸に「自ら考え学ぶ力」をさらに育てていくことが期待される。</p> <p>・授業改善では、身につけたい力を明確にし、職員全体で共通理解して実践している体制が評価されており、今後は基礎・基本の確かな定着をさらに図ることを期待する。</p> <p>・放課後子ども教室など地域と協働した取組が充実し、子どもの興味・関心を広げる良い機会になっている。</p> <p>・不登校支援について、小中が連携して安心安全な環境づくりや個別支援を進めていくことに、今後とも共に取り組んでいきたい。</p>

令和7年度の成果	令和7年度の課題
<p>・学校への極めて高い信頼と満足度: 保護者アンケートで「我が子を美山小学校に通わせて良かった」とする回答が100%に達しており、学校経営に対する信頼が寄せられた。児童も98.0%が「本校で学んで良かった」と回答している。</p> <p>・主体性を育む先進的な学びの定着: 「セルフデザイン学習」や「60分プロジェクト」、「児童主体の委員会活動」といった児童の主体性を尊重する取り組みが、地域や保護者から「自己肯定感や郷土愛を育む教育」として高く評価された。</p> <p>・高い自己肯定感と安心感の醸成: 全児童の自己肯定感の肯定的割合は87.8%(1年生は100%)と高く、学校が「安心して過ごせる場所(肯定率89.8%)」として機能し始めた。</p> <p>・多様性を尊重する校風と徳育: 命を大切にすることや思いやりを育む「徳育」への保護者の評価は96.5%と極めて高く、児童も91.8%が「他者への言動に配慮している」と回答している。</p> <p>・地域連携等による学びの多様化: ゲストティーチャーを招いた「ぐんぐんタイム(放課後子ども教室)」や地域行事への参加を通じ、地域全体で子供を育てる体制が強化された。また、多様性を考慮した担任制(チーム担当制)が、教師による児童の深い見取り(深化)に寄与していると評価された。</p>	<p>・高学年(特に6年生)の学習意欲と心理的支援: 6年生は「授業理解」は100%であるものの、「質問のしやすさ(63.2%)」や「勉強が好き(63.2%)」の数値が他学年より顕著に低く、学習参加への心理的ハードルの改善が求められている。</p> <p>・生活リズムとデジタルメディア利用の適正化: 1日のゲーム・動画視聴が2時間を超える児童が約4割(39.8%)に達しており、学年の進行に伴う就寝時刻の後ろ倒しも課題。家庭学習の習慣化とメディア利用ルールの確立に向けた家庭連携が必要。</p> <p>・読書活動の推進: 「我が子が読書好きである」と答えた保護者は50.9%に留まり、他の指標に比べて低調。朝読書やブックトーク、押し本の掲示など、本に親しむ仕掛けの重点化を保護者や地域と一緒に取り組むことが必要。</p> <p>・相談窓口の可視化とアクセスの向上: 一部の児童が悩みがあっても相談先を十分に把握できていない実態があり、掲示物などを通じて「いつでも相談できる」環境を可視化することが急務。</p> <p>・地域連携の運用効率化と持続可能性: 地域ボランティアへの協力依頼が間際になることがあり、準備期間の早期化が求められている。また、深刻な過疎化・児童数減少に対し、学校や地域の魅力を発信し続ける(学校だけではない)持続可能な体制構築が大きな課題。</p>